

内容でした。ピクルスや燻製、加工肉などが添加物の味と違って、しっかりと熟成された風味を感じ、食の安全レベルも非常に高いのではないかと感じました。また、ワルシャワ中央駅のショッピングモールには、とても美味しい定食屋さんがあり、どのお料理も、あまりの美味しさに感動しました。

子供を安心して遊ばせることができる環境や雰囲気があることも、とても素敵です。2歳の子供も連れて行ったのですが、公園だけでなく、子供が遊

べる場所がたくさんあり、彼は大満足でした。

帰国する飛行機の中で、「もっとポーランドを知りたいね」と夫婦で話し合い、検索をかけたところこちらの協会を見つけ、様々な活動をされていることを知りました。自分達が知らない北海道やアイヌについても大変興味があります。また、たくさんの書籍がHPで紹介されており、ポーランド協会の活動にワクワクしました。どうぞ、これからよろしく願いいたします。  
(さいとう・みか)



新刊  
紹介

菅原未栄詩集『櫻橋』発行:炎 2023.7

北海道の冬の海はいつだって、眠りと岩礁のせめぎ合いである。  
菅原未栄詩集『櫻橋』を読み終えた胸中の第一声はこの言葉だった。

### 北の大地の魂

菅原氏の生まれ故郷である根室には、私の生まれた道南檜山の荒磯との共通点がある。それは漁場の喧騒と深夜の星の輝き、それらがこの地続きの北の大地では共通の言語であると知るには最適な詩集だと私には思えた。漁場を表象すると思われる詩篇「いろけ譚」にはこうある。

あの日 浜の岩作さんは自慢のピカピカクラウンで／颯爽と浜からやって来た

檜山の人たちもかつて高級車と言えばクラウンであった。そして、威勢の良い男ほどクラウンをピカピカにし潮騒を切り裂きながら海岸線を突っ切っていく。菅原氏の根室にはその時代を表す豪華さや賑わいを感じられた。かつての漁場はそうだったのだ。

### 幻のオホーツク共和国

また詩篇「空耳」ではオホーツク共和国の存在を知らされる。私の道南では誰もが知るように箱館共和国がかつて存在した。官軍に追われ、独立を夢見た榎本武揚と土方歳三で有名だが、菅原氏の「空耳」では「——ほんかわさああん／空からか海からか加工場からか船からか／人っこひとりいない静寂から響いてくる」や「ねこのニヤニヤ ねこのニマニマ／あれはチェシャ猫」など女性ならではの視点で描かれたオホーツク共和国が表出する。

「幻の」とあるように箱館同様の独立を目指す動きが道南だけではなく、オホーツク圏にも存在したのではないかと推測が「お嫁に行くので根室離れるってわかってたのかい」という行から感じられる。北海道共通かもしれないが住み慣れた町を離れ、新天地を求める心はこの共和国建設の精神がしら

ず道民の深奥に眠っているためと指し示すかのような一篇である。

### 吉田一穂の心

また吉田一穂にも触れている詩篇「かいやぐら」は秀逸と言える。木古内の漁村生まれの一穂の詩篇「ひばりはそらに」を取り上げ、自らの心に一穂が棲み付いたかのように詩篇は始まる。伊達市などで観られるシャーマンの精神にも通じるこの作品は、北海道人であることを決定づける一篇ではないかとさえ感じてしまう。

ここでは胆振圏同様「ニムオロ」や「コイ・トウイエ」といったアイヌ語が詩篇に使われ、先住民への愛にも言及する。そして、隣国ロシアとの対話が必要とされる「根室の沖の彼方 寂しくたたずむ “国後島”」で、現代のウクライナ戦争に至るまでを包括するような世界観がこの詩篇では描かれている。菅原氏自身の詩人としての大器と成熟さを表出させるこの一篇は、まさに吉田一穂の心を自らに宿らせたと言っても過言ではない、道民詩人としての尊厳が描かれていると感じられた。

いずれにしても根室である。その根室を通じて母性や恋をフローさせつつ、北海道全体を見渡すその視点で描かれたこの詩集『櫻橋』は、多くの人に読まれるべき詩集と感じられた。

最後にこの詩集の巻末詩の最終連を抜粋して終わりたいと思う。ここに菅原氏の決意が示されている。北海道民の魂である。

ここだ ここに決めた／坊主頭は 昆布で隠し／海務に紛れて『たま迎え』／きつと 生き抜いてみせる／ただ独り この紅煙で

(小篠真琴、詩人、今金町)